地域に目を向けて：積極的にボランティア活動・意識改革を

松崎靖司
臨床医学系助教授

近年，NGO，NPOなど，ボランティア団体の活動が盛んになってきている。初等，中等教育にも，ボランティア活動を授業の一環としようとしている。

本学の，教職員，学生，院生の中でも積極的にボランティア活動しておられる諸兄が多くおられると思う。しかし小生の所属する地区では，仕事は大変すばらしいが，必ずしもボランティア活動が盛んとはいえないかもしれない。

すべて我が大学にあてはめてのことはいえないかもしれないが，一般論として，最近私が行っている活動を通してボランティア活動について考えることを述べてみたい。

国立大学法人化と地域貢献：

国立大学も二年後には法人化という形へ移行しようとしている。それに伴い，現在，大学の組織編成，管理運営方法，評価方法など議論されているまっただ中である。この流れは止めることなく，どんどん進んでいく。そしてこの中で，評価対象に必ず社会活動について問う項目が入ってくるであろう。大学人は，えてして評価されないことをやらないという意識が少なからず存在すると思われる。必ずしも全員がそうであるとは思わない。しかし現況は，ボランティアは学内で評価されないから，自分は自分の利益になることだけこなせばよいという風潮がでてくることは当然であろう。

文部科学省からも，地域貢献支援事業費なる予算がでている今日である。高度な研究・教育を担う大学であっても，地域に貢献する必要性を我々は問われているのである。我々は茨城県に住み，つくば市で働く。住居・職場のある土地へ貢献をすることは当然のことであろう。大学自体も地域で社会認知がされていかないと，ただ素晴らしい研究成果だけあげるのでは，今後はいき詰まるのではない

であろうか。このような時代の流れからも，教職員，学生，院生は地域に目を向ける必要性が当然でてくる。どのような形で，そこへ関与するかである。方法は色々あろう。

地域連携：

C型肝炎が近年非常に大きく取りざたされ，社会問題にもなっている。私たちのグループは10年程前に茨城の石岡市以南の医師会の先生方と一緒に，県南地区で肝臓病の患者さんの経過観察についての情報交換，病院と診療所のより良い連携を目的とする研究会を立ち上げた。肝炎手帳なるものを作り，患者さんの検査データを病院と診療所間の連携で医師同士が共有するのは勿論として，患者さんもデータを自分で保存し，持つ，病診，病患連携という試みを行ってきた。各医療機関でのデータの共有化が未だできていない現在，原始的ではあるがこの方法をとることで，連携プレーはとりやすくなった。そして私たちが患者さんの応援をすることで，2年前に県南地区の患者さん方が中心となり，肝臓病の患者の会が設立された。ここまでくるには，医師・看護師・患者さんの連携をはかる，という多くの方々のボランティア活動があった。手帳の作成や，医療機関の連携，公開講座の開催など，市民・患者さんのために無償で体を使った方々が多くいる。その成果として，肝炎手帳を肝臓学会が全国展開に使用するということにまでなった。患者さんの会も全国患者団体と連動し，今後大きな役割を担うこととなろう。草の根的にやってきた活動がここまで実る。関わった方々は皆充実感を持っていることと思う。

NPO法人の活用

現在社会の中で，特に医療の中で大変重要なこととして求められていることに，説明責任と透明性がある。この説明責任と透明性を市民，患者の皆様にお示しすることでより良い信頼関係を構築し，行政・医療機関・市民の間で手をつなぐということが浮かび上がる。このようにして，我々はNPO法人「市民のための健康・医療ネットワーク」設立へと動いた。

特定非営利活動法人（NPO）とは一般的にどのような団体であろうか。「NPO法人」は，平成10年に制定された「特定非営利活動促進法」という新しい法律により定められた。この法律によりそれまで任意団体として活動していたボランティア団体に法人格が与えられ，法的に承認された団体となることができた。そ

してNPO法人にはNPO法が制定される以前のボランティア団体や市民団体では得られなかった大きなメリットが与えられた。それは官公庁や，自治体との連携がスムースになること，そして助成金などの取得が可能になるという点である。

さらにNPOは行政，企業とは全く異なった組織であり，新しい社会を形成する単位として期待されている。私たちは，日本全国で今問題になっている縦割り社会を解消し，うまく横断的に物事を進めていきたいという希望を持っている。NPO活動にいろいろな方々が参加することで今までの既存の場にない機能を発揮し，横断的組織を作る，そして新しい社会を作っていこうということがこの基本的な理念である。

学生，院生がボランティア活動に積極的に参加してもらえればなによりと考えている。自分たちの手で，市民へ還元することが実現するのである。身近なことから，ボランティアを行うことがよいのではないだろうか。

今後の展開

私たちは，市民，行政，医療機関，企業や研究者，全員が輪となって手をつなぐということが重要であると考えている。

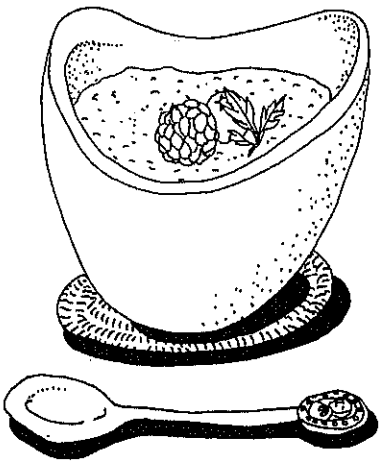
市民のため，やはり患者さんや市民に医療情報などを還元することが大切である。次に科学に基づいた医療とヘルスケア，健康増進を進行していくために，信頼関係を構築するという努力をしなくてはいけない。そして患者・市民，医療機関，が一体となって，企業さらには行政との連携をはかり，医療における諸問題の解決策を広い視野から共に考えることである。

また人に優しい街づくりがある。IT化を促進し，より住みやすい新しい街を作ろうという計画がある。新しい都市計画に医療・福祉サービスというソフトを埋め込む目的で，新しい街の中にいかにしてこれからの高齢化時代に対してより住みやすい，いい街づくりをするかということを皆で考え，実行する。素晴らしいボランティア活動になるのではないだろうか。

まとめ

これらの理念を具体的に実現させていくためには，患者さん，市民，医療従事者が同じ土俵で医療を共有することが必要であろう。医療従事者だけが高い立場にあってはならない。患者さんも市民も同じ土俵で自分たちも一緒に医療・福祉に参加しているという気持ちを持って頂

くということが大切である。

どのような形であれ，少しでもボランティア活動を通して地域に貢献できれば，本学の人的資源は活用される。様々な形でボランティア活動への皆の参加という意識改革をすることが重要な課題であることを提言する。

（まつざきやすし　消化器内科学）